

令和6年度 山口県立大学 看護栄養学部看護学科

一般選抜（後期日程）

「小論文」

試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

注意事項

- 1 解答は全て解答用紙に記入してください。
- 2 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせてください。
- 3 不正行為について
 - ① 不正行為については厳正に対処します。
 - ② 不正行為に見えるような行為が見受けられた場合は、監督者が注意します。
 - ③ 不正行為を行った場合は、その時点で受験をとりやめさせ退室させます。
- 4 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰ってください。

問題 以下の文章を読み、「老い」に関する筆者の主張を読みとり、「老い」に関する筆者の主張をふまえた上で、それに対するあなたの考えを述べなさい。また、それを今後の高齢者との関わり方においてどのように活かしたいか述べなさい。すべての解答を800字以内で解答用紙に記入しなさい。

還暦を過ぎて感じることもある。老いの時間は子どもの時間とは違うということだ。

子どもたちと同じように、老年期の人間は何かさし迫った必要性を感じて時間を組み立てはしない。時の流れとともに出会う出来事をそのまま受け止めている。そこには似たような時間が共有されている。だから昔から、老人と子どもは息が合うのだ。

しかし、成長にかかる時間は子どもたちにほぼ一様に訪れる。小学生のまま成長が止まることはないし、すぐに大学生になれるわけではない。子どもたちは、同年齢の友達と同じように成長していく姿を自分と比較しながら、自分の将来の姿を夢見ることができるのだ。

一方、老いは一様にやってくるわけではない。足腰の衰えが先にくる人もいれば、急に認知症になる人もいる。あっという間に老けこんでいく人もいれば、年齢の割には若く見える人もいる。病で早く亡くなる人もいれば、長寿を全うする人もいる。自分があとどのくらい生きられるのか、はっきりしたことはわからない。子どもたちが将来の目標をもって生きるのに対し、老人たちの視線は不確かな霧のなかへ注がれているのだ。

しかも、老いの受け止め方も千差万別だ。物忘れや記憶違いが多くなってあわてる人もいれば、それをいいことにひょうひょうと生きる人もいる。周囲から相手にされなくなって孤独に悩む人もいるし、これまでの人間関係を断ち切って新しい仲間を求める人もいる。これまでの仕事にさらに磨きをかける人、全く違うことをはじめる人というように、老年期の過ごし方は人それぞれに異なっている。それは、老いの内容がこれまでの人生の過ごし方によって大きく異なるからだ。老人は個性的な存在である。子どもたちと同じように、老人たちを集団で扱うことはできない。

人類の進化史のなかで、老年期の延長は比較的新しい特質だと思う。ゴリラやチンパンジーなど人類に近い類人猿に比べると、人類は多産、長い成長期、長い老年期という特徴をもっている。多産はおそらく古い時代に獲得した形質だ。人類の祖先が安全で食物の豊富な熱帯雨林から出て、肉食動物の多い草原へと足を踏みだしたころ、幼児死亡率の上昇に対処するために発達させたと考えられる。成長期の延長は脳の増大と関連がある。ゴリラの3倍の脳を完成させるため、人間の子どもたちはまず脳の成長にエネルギーを注ぎ、体の成長を後回しにするよう進化したのである。脳が現代人並みに大きくなるのは40～60万年前だから、そのころすでに多産と長い成長期は定着していたに違いない。

しかし、遺跡に明確な高齢者の化石が登場するのは数万年前で、ずっと最近のことだ。これは、体が不自由になっても生きられる環境が整わなかったからだと思う。定住して余剰の食料をもち、何より老人をいたわる社会的感性が発達しなければ、老人が生き残ることはできなかったであろう。家畜や農産物の生産がその環境整備に重要な役割を果

たしたことは疑いない。

ではなぜ、人類は老年期を延長させたのか。高齢者が登場したのは、人類の生産力が高まり、人口が急速に増えていく時代だった。人類はそれまで経験しなかった新しい環境に進出し、人口の増加にともなった新しい組織や社会関係をつくりはじめた。さまざまなあつれきや葛藤が生じ、思いもかけなかった事態が数多く出現しただろう。それを乗り切るために、老人たちの存在が必要になった。人類が言葉を獲得したのもこの時代だ。言葉によって過去の経験が生かされるようになったことが、老人の存在価値を高めたのだろう。

しかし、老人たちは知識や経験を伝えるためだけにいるのではない。青年や壮年とは違う時間を生きる姿が、社会に大きなインパクトをあたえることにこそ大きな価値がある。人類の右肩上がりの経済成長は食料生産によってはじまったが、その明確な目的意識はときとして人類を追いつめる。目標を立て、それを達成するために時間に沿って計画を組み、個人の時間を犠牲にして集団で歩みをそろえる。危険や困難がともなえば命を落とす者も出てくる。目的が過剰になれば、命も時間も価値が下がる。その行きすぎをとがめるために、別の時間を生きる老年期の存在が必要だったに違いない。

昔、屋久島で野生のニホンザルを調査しはじめたとき、一つの群れが分裂して二つの群れができた。血縁の近いメスたちが分派行動をして、それにオスや子どもたちがついて歩くことでやがてはっきりと別々の群れになった。遊動域がいっしょだから、よく分派群が衝突し、いがみ合いになった。そんなとき、ポッシーと名づけた老メスが不思議な行動をとった。ゴッゴッと威嚇音を出してにらみ合うオスたちの前をひょうひょうと通り過ぎて、群れの間を渡り歩いたのだ。まるで、敵対する現場など目に入らないかのように落ち着いて葉っぱを食べはじめた。それを見て、サルたちもあつけにとられたように戦いを止めた。

そういえば、ポッシーはどちらの群れにも出現することに私たちは気づいた。群れの分裂が疑われた当初、なかなか分裂したと断定できなかったのは、この老メスがどちらの群れにも姿を現していたせいなのである。分裂したどちらの群れにもポッシーの子どもたちが含まれているからだろうと私たちは考えた。しかし、ポッシーは若いメスやオスたちのいがみ合いとは全く別の世界にいたのである。人間以外の動物の世界でも、老いという境地が若者たちの共存へ重要な意味をもっていると感じたのはそのころだった。それは、次に調査したゴリラにもさらにはっきりと認めることができた。

人間の社会においても、老境の存在は対立を解消し平和を実現する上で常に大きな影響力を発揮してきたに違いない。老人たちはただ存在することで、目的的な強い束縛から人間を救ってきたのではないだろうか。その意味が現代にこそ重要になっていると私は思う。

出典：山極寿一；ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」，毎日新聞出版，2018，60-64頁，一部改変。

令和6年度 山口県立大学 看護栄養学部看護学科

一般選抜（後期日程）

入学試験「小論文」出題の意図

日本の高齢化は急速に進展しており、人口構造の中で高齢者の占める割合が多く、若い世代の社会保障費負担の増大の要因としてネガティブに論じられることが多い。一方で、高齢者が、豊富な経験やスキルを若い世代に継承していくことも期待されており、高齢者を巻き込んだ企業や地域住民の取り組みの重要性も認識されるようになった。

筆者は、人類の進化の過程から高齢者の存在価値が高まってきたことについて述べている。また、ゴリラの生態と比較しながら、平和を実現する上での高齢者の存在の重要性を示している。

本試験では、この文章を正確に読み取る理解力、読解力（AP《技能》と関連）を評価する。また、高齢者の存在価値について深く検討し、自身の考えを述べる論理的思考力（AP《思考力・判断力》に関連）と制限字数内で文章を記述する文章構成力を含む文章表現力（AP《表現力》に関連）および語彙力（AP《知識》に関連）を評価する。